

ふるさと

ひょうご

東京兵庫県人会会報

令和3年6月号

Vol.140




特別企画

首都圏で巡る「兵庫人の足跡」
大都会に残る偉業の証し
ふるさとへの郷愁とこだわりと

ふるさとを語る

落語家

桂 吉坊 さん



確実にやるのはどこでもできる。
確実に速くやるからこそ「価値」になる。

三井住友銀行

03 特別企画

首都圏で巡る「兵庫人の足跡」 大都会に残る偉業の証し ふるさとへの郷愁とこだわりと

07 ふるさとを語る

落語家 桂 吉坊 さん

09 ふるさとの話題 兵庫県広報戦略課

13 ふるさと情報便

兵庫県内市町からの最新ニュース

19 カムバックひょうご人

株式会社由利 清水 真里 さん（豊岡市）

22 尚志館だより

23 のののの会

中堅・若手会員の会

25 われらひょうご人

関東銀嶺会会長 野木 秀子 さん

27 第65回ふるさとひょうごふれあいセミナー

「がんを知ろう～女性乳腺外科医からのメッセージ～」

昭和大学病院乳腺外科教授 明石 定子 先生（オンライン配信）

30 俳句サロン「道草」通信

31 会員サロン

水と薪の話／藪本 沙織 さん（たつの市出身）

33 新規会員のご紹介

35 見つけた！出会った！ふるさとひょうご

アンテナショップ通信

37 読者サロン

U5H（兵庫五国連邦）プロジェクト

プレゼントクイズ



（表紙）東京2020 オリンピック聖火リレーを実施！

5月23日（日）に姫路城三の丸広場（姫路市）、24日（月）に篠山城跡三の丸広場（丹波篠山市）において、聖火リレーが実施されました。

新型コロナウイルス緊急事態宣言発令中でもあり、公道でのリレーは中止されましたが、舞台上でのトーチキスや一人20メートルを走る聖火リレーが行われました。

詳しくは、「ふるさとの話題」12ページへ

（表紙写真：姫路市）



丹波篠山市



勝海舟が愛した洗足池の夕景

ふるさとへの郷愁とこだわりと

「兵庫人の足跡」 首都圏で巡る 大都会に残る 偉業の証し

地方から東京へ出て輝く人がいるように、関東圏で生まれ育ち、後に別の場所で実力を開花させる人もいる。今も昔も東京は、志を抱く多くの人が行き交う一大拠点となっており、都会の街角や自然豊かな公園などさまざまな場所に兵庫県人たちの足跡が残されている。その「生きた証し」は、ふるさとへの思いにあふれていたり、今も人々に感動を与えたりする。新型コロナウイルス感染症の影響で、旅もままならない今、首都圏を中心に、兵庫ゆかりの人々の足跡をたどってみたい。きっと、みなさんが取り組んでいる事業や仕事への刺激になり、ふるさとへの思いも高めてくれることだろう。

(神戸新聞東京支社編集部長 小西博美)

赤木正雄像

政治の地に「砂防の神様」 防災にささげた一生

かつて、田中角栄や中曽根康弘といった元首相や大物議員が派閥や個人の事務所を構え、長く保守政治の中心だったことで知られる千代田区平河町の砂防会館。2018年に建て替えられた本館と別館との間に「砂防の神様」とたたえられた赤木正雄氏の銅像が立つ。

赤木氏は兵庫県豊岡市に生まれ、豊岡中学校を経て東京帝国大学（現東京大学）を卒業後、旧内務省で全国の砂防工事を手掛けた。自費でオーストリア・ウィーン農科大学にも留学して先進的な砂防技術を学



新緑の下、ステッキを持って立つ赤木正雄像



像の周囲にはゆかりの石が敷き詰められている

び、帰国後は、近代的な砂防技術を持つ技師としても活躍。貴族院、参議院の議員も務めた。

生家は円山川沿いにあり、たびたび河川の氾濫で家屋や田に被害を受けていたという。砂防を一生の仕事にしようと思ったのは、豊岡中から進学した第一高等学校（東京大学の前身）で、校長だった新渡戸稲造が語った話に感銘を受けたからだ。新渡戸は関東豪雨の後、始業式で「治水は決して華やかな仕事ではないが、ここに集まった君たちのうち一人でも一生を治水にささげ、災害防止を志す者はいないか」と呼び掛けたという。

こうして、赤木氏は、滋賀県の瀬田川支流をはじめ、吉野川、淀川、飛騨山系、六甲山系など55歳で退官するまで全国の現場を駆け巡った。

輝く青葉の下、ステッキと帽子を

手に、現場に向かう姿だろうか、ズボン姿で立つ赤木氏。銅像の周囲に敷き詰められた石は、赤木氏が足跡を残した北海道から沖縄まで全国47都道府県から届けられた河原の石だという。それぞれに、「兵」や「京」「岡」などと都道府県名が1文字刻まれている。それに、ふるさと豊岡の石を加え、48個の石に囲まれている。郷土愛を感じさせる赤木氏の銅像に少し見とれた。

酒井抱一の墓

光琳に傾倒の天才絵師 姫路藩主の次男、 築地に眠る

銀座4丁目からぶらぶら歩き、歌舞伎座を通り過ぎて築地へ。古代インド仏教様式の立派な建物、築地本願寺が見えてくる。ここに眠るのは、名門酒井雅楽頭家の姫路藩主、酒井忠仰（ただもち）の次男で画家の酒井抱一（1761～1828年）だ。

東京都教育委員会によると、忠因（ただなお）と名乗っていたが、寛政9（1797）年に37歳で出家し、



古代インド仏教様式の外観が目を引く築地本願寺



絵師酒井抱一の墓所

浅草千束に移住し、抱一と号した。寛政の後半ごろから尾形光琳の画風に傾倒。琳派の画風にほかの技法も取り入れた独特の作風で、粹でしゃれた江戸琳派の創始者となった。代表作に「光琳百図」「四季花鳥図屏風」などがある。抱一の墓は東京都指定



勝海舟の功績を紹介する大田区立勝海舟記念館

旧跡になっている。

抱一の墓は、ほかの著名人の墓と並び、正門を入ってすぐ右側にあり、墓の前にはベンチも置かれ、都民らが弁当を広げて日なたぼっこをしている。異国情緒漂う建物を背景に天才絵師に思いをはせる。

勝海舟記念館

神戸に海軍操練所 江戸を救った男、 洗足池を愛す

東急池上線に揺られ、洗足池（せんぞくいけ）駅で降りる。駅前には



今も洗足池の近くに眠る勝海舟夫妻

は、勝海舟が愛したと言われる洗足池が広がる。春の暖かい陽光に照らされ、池はきらきらと輝いている。区民の憩いの場となっており、多くの人たちが散策に訪れていた。

江戸のまちを戦火から救ったことで知られる勝海舟。幕府の使節団として、米国のサンフランシスコへ向け、咸臨丸（かんりんまる）で太平洋を渡った海舟は帰国後、日本が国際社会で生き抜くには、強い海軍をつくることが重要だと気付く。海舟の提案や弟子である佐藤与之助や坂本龍馬らの活躍で1864年、神戸に海軍操練所が開設された。

その海舟の功績や思いを紹介する「大田区立勝海舟記念館」が2019年9月に、大田区南千束2に開館し

た。記念館は1階と2階に分かれている。1階は実物の資料を基に幕末から明治を駆け抜けた海舟の一生をたどる「海舟クロニクル」がお出迎え。先に進むと海舟の言葉からその人物像に迫る「海舟ブレイク」のコーナーやCG映像で咸臨丸の航海を体験する「時の部屋」がある。

2階は、記念館の近くにある洗足池とその周辺のジオラマや海舟が好んで使った数多くの印章コレクションなどが展示されている。

また、大型モニターが設置されており、「若き日の海舟」などの解説を視聴することができる。

第15代将軍、徳川慶喜が大政奉還した後も、倒幕勢力は新政府軍を組織し、徳川を倒そうと江戸に兵を進めた。これを防ぐため、海舟は新政府軍の重要人物だった西郷隆盛と話しをつけ、江戸城明け渡しを条件に攻撃を中止させた。最終的に慶喜の身柄や幕府の軍事力について話し合うため、池上本門寺へ向かう前に、



太陽に照らされて青く輝く洗足池

海舟はここ洗足池に立ち寄ったという。

江戸城無血開城という歴史の大きな節目に登場した洗足池。海舟はそのほとりに別荘「洗足軒」を建てた。自然を慈しみ、詩作を楽しむなど77歳で亡くなるまでこの地を愛し、別荘のそばに葬られた。記念館の近くに海舟夫妻の墓がある。

また、海舟は西郷に敬意を抱いていたといい、墓の近くに西郷を悼む「南州留魂詩碑」も残されている。

小林一三翁生家跡と雅俗山荘

故郷の面影を求めて 芸術と生活の二面性

阪急電鉄の創業者で、宝塚歌劇団を設立し、百貨店経営や宅地開発など関西を中心に幅広く事業を展開した実業家小林一三は、山梨県北巨摩郡河原部村（現在の韮崎市本町）で生を受けた。実家は「布屋」と言われる商家で製糸や酒造などの商いをしてきた。一三が生まれた年の夏、母きくのが21歳の若さで亡くなり、姉と共に布屋本家の大叔父夫婦に引き取られ、大事に育てられた。



幼い頃、一三が住んだ韮崎の布屋本家
（「甲府繁昌記」から、阪急文化財団提供）

甲府盆地の北西部に位置する一三の生家跡は、JR韮崎駅から徒歩約10分のところにあった。現在は「にらさき文化村」として整備され、市民らが集える小さな公園になっている。そこには「小林一三翁生家跡」と記された石碑が建つ。すぐ横の花壇には、逸翁すみれ会や地元商店の観栄会によって色とりどりの花が植えられていた。



韮崎市にある小林一三翁生家の碑



一三を記念して植えられた花々

韮崎市教育委員会教育課で文化財を担当する関間（うるま）俊明さんは「以前は関西ほどの盛り上がりはなかったが、近年は一三が通っていた韮崎小学校の授業で取り上げられたり、顕彰する会があったりして、改めてその業績が見直されている」と話す。

その関間さんが、一三が関西で暮らした池田市を訪れた時のこと。阪急池田駅に降り立つと「韮崎と似ている」と感じたという。

一三が1957年に亡くなるまで暮らした洋館、雅俗山荘は現在、小林一三記念館として整備され、見学することができる。館長の仙海義之さん（59）も「山と川、平野が出合うこの池田で、韮崎の地へ思いをは



池田市にある小林一三記念館（阪急文化財団提供）

せたのではないかと推測する。

雅俗山荘という名の通り、そこは芸術と生活の両方を楽しむ場所だった。建物の構造も芸術品で客をもてなすパブリックスペースと、家族が生活を営むプライベートスペースに分かれる。お茶人と交流するための茶室も二つ設けた。この「お客さんファースト」のルーツはどこにあるのだろう。「それは、手広い商いをする布屋に生まれ、商売のマナーや顧客の喜ぶ姿を見て育ったことが大きいのでは」と仙海さん。コロナ禍で、鉄道も百貨店も厳しい経営を強いられているが、「一三さんなら、きつとお客さんが望んでいることを何かしら考えて展開したでしょうね」とほほ笑む。



一三と家族が住んだ雅俗山荘（阪急文化財団提供）